

阮朝治下ベトナムにおける銀流通の構造

多賀 良寛

17世紀以降、ベトナム経済は東アジアの広域的銀流通と密接に関連しつつ銀との結びつきを強めていった。19世紀になって阮朝が成立すると、銀流通の裾野は大きく広がり、銀の重要性はかつてないほどに高まることとなる。本稿は、これまで明らかにされてこなかった阮朝治下ベトナムにおける銀流通の多様性と、各種銀貨幣の相互関係について考察を行うものである。

阮朝は嘉隆帝の統治期より積極的な銀流通促進政策を採用したが、その中心となったのは、銀錠の公鑄と銀納制の施行であった。阮朝による銀錠の公鑄は、1803年に行われた中平銀錠の鑄造に始まる。阮朝によって鑄造された銀錠は「中平銀」「官銀」などと呼ばれ、納税や給与の支払いに用いられた。また公鑄銀錠には十成銀（純銀）であることを表わす「精銀」という文言が印刻され、民間の多様な銀貨幣を束ねる価値基準銀としても重要な役割を果たした。

19世紀のベトナムでは、公鑄銀の他にも様々な民間銀の流通が見られた。その中でも特に重要だったのが、北部ベトナムの山間部を中心に流通した「土銀」と呼ばれる低品位の民間銀である。北部の山間地帯はベトナム有数の鉱山地帯であると同時に、中国の西南諸省とも境界を接しており、中越交易の舞台ともなった。この地域では中央の官鑄銀よりも土銀の流通が支配的であったため、のちに阮朝は土銀と官鑄銀との間に換算レートを設定、銀税の土銀よる代納を認めるようになった。

民間銀において土銀と並び重要であったのは、「洋銀」と呼ばれる洋式銀貨である。17世紀以来、ベトナムにはスペインドルを中心とするヨーロッパ諸国の1ドル銀貨が流入してきていた。阮朝は交易に訪れる商人に対し、関津税や港湾税をこれら外国銀貨で納入することを認めていた。また阮朝は洋式銀貨の影響を受けて「飛龍銀錢」と呼ばれる独自の洋式銀貨も鑄造した。